

世界でいちばん美しい景色のはなし

ひとつの花に話しかけるだけで、
世界中の花に話しかけたことになる。

- 1 僕が生まれた日
- 2 占い師のおじさん
- 3 忘れてしまったこと
- 4 はじめての旅
- 5 砂漠へ
- 6 砂漠のはての花
- 7 息子が生まれた日
- 8 世界でいちばん美しい景色

ある本に、「写真家は、ほんとうに美しい景色を見たとき、写真をとらない」という一節がありました。もちろん、すべての写真家がそうだとはかぎらないでしょうが、ただ、写真家ではない僕も、なぜだか、この言葉の意味がよくわかりました。

というのも、僕がほんとうに美しい景色とでくわしたあのとき、そもそもカメラを持っていなかったのですが、たぶん持っていたとしても、シャッターをきらなかつたと思うからです。世界を包みこむような景色を前にして、頭がカラッポになっていたはずが、ふと浮かんできたのは、母と父にかわるがわる抱きかかえられていた幼い頃のしあせな記憶で、こんな美しい景色が存在する理由と、僕自身が存在する理由が、同じもののような気がしたからです。

つまり、僕はこの世界に、永遠に記録されている存在だと、わかったのです。

「おまえは、生まれる前から不思議な子だった」

と、僕のお父さんはよく言っていました。

つめたい風が吹き荒れていた、冬の夜のことです。

お母さんが眠ったまま、ウーウーと、うなっていました。お父さんが身体をさすって名前を呼んでも、ぐったり横になっているだけで返事がありません。やがて、眠ったままのお母さんが、

「アタマ、いたいので…」

と、言いました。

「どうした、大丈夫か？」

お父さんがつよく身体をゆすつても、お母さんは目を閉じているだけです。それでもまだ、

「いたいよ、オトサン」

と、うなっていたのですが、そのときお父さんは、あれっ、と思ったのです。というのも、お父さんが「お父さん」と呼ばれたのは、はじめてだったからです。

「ここか、ここにいるのか？」

お母さんのお腹をさすると、また声がありました。

「ボク、あたまたいたいの。ひとりでさみしいし」

このとき、お父さんは、ピカッと、ひらめいたそうです。いま、しゃべっているのは、お母さんではなく、お腹の中の赤ん坊ではないか、と。

「…生まれくるのかい？」

お父さんは、小さな子どもに接するように話しかけていました。

「ボク……、うまれてきて、いいの？」

「もちろんだよ」

「どうして？」

「どうしてって、君のお父さんとお母さんが、待ってるから」

「……ウン」

その10日後、僕は生まれてきました。

僕は、自分が生まれてきた、その日のことを、よく覚えています。

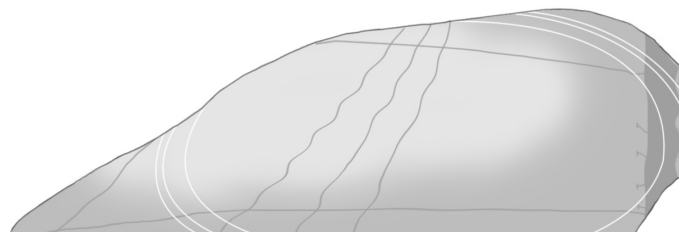
ちょうど、僕がお腹から出てきたとき、
海辺に座っていた男の子の前で、
イルカがジャンプしました。

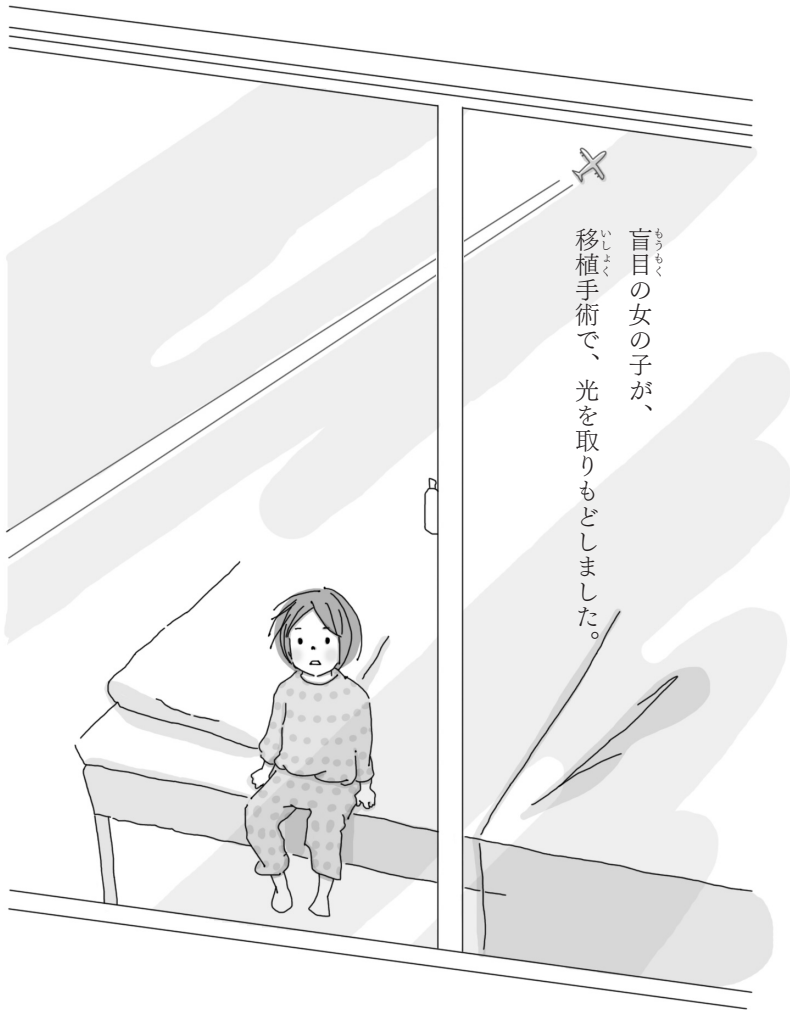


ある殺人犯が、牢獄ろうごくの中で聖書を読みきりました。



サラリーマンが、虹にじを追いかけて駆け出かしました。





爆撃ばくげきを命令だいたうりようした大統領だいとうりようが、
その命令を取り消しました。

干ばつの村で、雨が降りだしました。



旅の女性が、砂漠に花を植えました。



ある大金持ちが全財産を投じて
遊園地をつくり始めました。



2 占い師のおじさん

僕は、4歳になりました。
幼稚園に通いはじめたのですが、いつも、運動場のすみっこで、ひとりぼっ
ちになってしまいました。

自由に遊んでいい時間でも、何もすることがないので、一人で口をパクパク
させて立っていました。とにかく、どうしてかわからないのですが、いつだっ
て、ここにはいけない、気持ちでいっぱいになり、無邪気に遊ぶ気がしな
かったのです。

とはいえ、そんなとき僕は、いつも「声」と話していたので、たいくつ退屈しません

でした。ひとりでいると、頭のうしろのほう、正確には耳たぶの裏うらのほうから、声が聞こえてくるのです。

小さな女の子の声でした。

「ねえ、いっしょにおそら、とばない？」

と、いつも、こんな具合に、へんなことを言ってきます。

「ぼく、とべないよ」

「なんで、なんで！」

家に帰っても、よく聞こえてきたものです。

「ねえ、なにたべてんの？」

「ごはんだけど」

「へえ、おいしそう」

けれど、声と話している僕を見て、お父さんも、お母さんも、ひどく心配し

ていたようです。じつは僕は、ただでさえ話しはじめるのがおそかった上に、ひごろも、ほとんど言葉をだしません。その僕が、やっと自分から話しはじめたと思えば、その相手が見あたらないわけです。

けっきょく、僕は幼稚園を卒園する頃になっても、友だち一人できず、その上、オモチャやゲーム、テレビにすら見向きもせず、いつも空ばかり見て、口をパクさせていました。

そこで、小学校に入る前、ついに、お父さんもお母さんも「どうにか、ふつうの子にしないと……」と思つて、相談そうだんをはじめたので、僕は大きな病院から、山奥の神社、温泉など、あちこち、つれていかれました。

いろいろな人と会いましたが、たいがい、言われることは、どこでも同じでした。あと何年かすれば、ちゃんとした子どもになるよ、と。ただ、その中で一人だけ、僕がおかしくないことをはつきり言いきつて、まるで大人と話すよ

うに、僕に話しかけてくれた人がいました。

「はい、30分、5千円だよ」

頭にいくつも寝グセがあり、あんまりお風呂に入っていないようなニオイがするおじさんです。イスに深く腰かけていて、しばらくだまっていたいますが、やがて机の上にいるろろな道具をならべ、まず、僕にこうたずねてきたのです。

「君が生まれた日と、生まれた時刻を言っごらん」

このとき、僕は自分の誕生日を覚えていなかったもので、かわりに、自分が生まれた日に起こったことを話そうとしました。それをいちばん覚えていたからです。

「あのね、ぼくが生まれた日に……」

「待った。すうじ、だ。数字だけ言えばいいんだ。私は、君を占ってあげるんだよ」

おじさんは自分のことを、占い師という職業だと言っています。

それでも僕は、聞かれたことには答えず、こう言いかえました。

「ぼく、生まれた日にあつたこと、しってるよ」

「……なんだって？」

この言葉ひとつで、おじさんの顔つきがかわつたのを、はつきり覚えていいます。

「それは、病院とか、分娩室ぶんべんしつでのことじゃないよね？」

「じゃないよ、じゃない。ヒトがいつばいいるところとか、なんにもなくて広いところとか」

「やはりそうか……。心配せんでいいよ、お母さん」

占い師のおじさんは、机の上の占いの道具をぜんぶしまいこみ、きちつと姿勢を正して、話しはじめました。

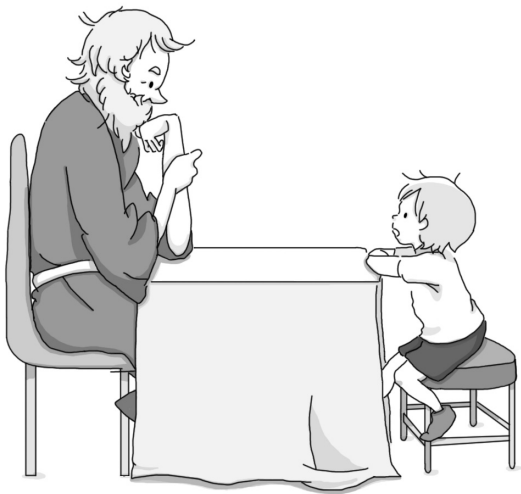
「君は、自分が生まれた日に起こったことを覚えているんだね」

「うん」

おじさんの話は、こうです。人はもともと、生まれる前には、つくる前のプラモデルみたいに、世界というひとつのものにつながっているのです、世界にいる人すべてと話ができるし、世界で起こることをすべてを知っているのだと。生まれてくるときの衝撃しょうげきで、そんなことを忘れてしまうわけですが、たまに、僕のように、しつこく覚えている子どもがいるのだそうです。

占い師のおじさんは、すでに、なにもかも、わかっていました。

「君は、幼稚園でも、公園でも、じつはお母さんのお腹の中にいたときからも、ここが自分の居場所なのか、とうたがっていたのだろう。ほんとうにこの世界に生まれてきていいのか、わざわざお父さんに聞いたほどだろう。君がそう思ったことは、まちがっていない。いや、むしろ正しい。世の中というところは、つねに、君のような人には暮くらしにくいからね。ところで君は、どうして、そ



んなことをしつこく覚えているのかい？」

「・・・知らないけど」

「では、教えてあげよう。自分がなぜ生まれてきたのか、たしかめるためだ」
「ふうん」

「まあ、そもそも、そんなことを問いつめて、ほんとうにわかる人など、めったにいないがな」

「おじさんは、わかった人なの？」

「もちろん、わからん人さ。だからこんな仕事をしているのだ。君は、それがなぜか、たしかめなさい」

「どうやってたしかめるの？」

「私はわからないから、どうやってたしかめるかも、自分で考えなさい。けれど、君は、大人になって、自分の力でどこへでも行けるようになったとき、旅にで

るだろう」

「・・・ふうん。どうして旅にでるの？」

「おお、やはり君のような子は、そう聞くと思ったよ。教えてあげよう。旅にでるのは、美しい景色を見るためだ。美しい景色を見ると、自分がなぜ生まれてきたのか、わかるからね。まあ、それだけのことだよ」

このおじさんと会って、^{相談}は終わったようで、僕はどこへもつれていられなくなりました。

その日の夜のこと、

「なあ、誰と話してるんだい？」

いつものように、声と話す僕を見て、ついにお父さんが聞いてきました（いつもは、不思議そうに見ているだけでした）。

「おんなのこ、だけど・・・」

「そうか、やっぱりな。でも、その子、お父さんには見えないんだ。どこにいるんだい？」

「っっ・・・」

僕は、だんだん大きくなってきたお母さんのお腹を指さしました。

妹が生まれてきたのは、それから、ちょっと後のことです。

3 忘れてしまったこと

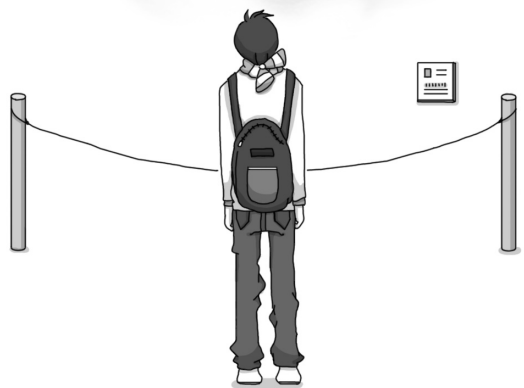
僕は、自分が生まれた日に起こった数々の出来事や、世界中の美しい景色を、たしかに、覚えていました。「覚えていたこと」というものは、僕にとって、どこでどれだけひとりぼっちになってもまるで平気なほど、たいせつな友だちでした。

しかし、毎日すこしずつ、思いだすのに時間がかかるようになり、そして――、僕は、だんだん、だんだん、そんなことを覚えていたことすら忘れて、大きくなっていきました。けれど、ときおり、たとえば、道でころんだり、どうしても眠れない夜に、忘れてしまったことを思い出しました。

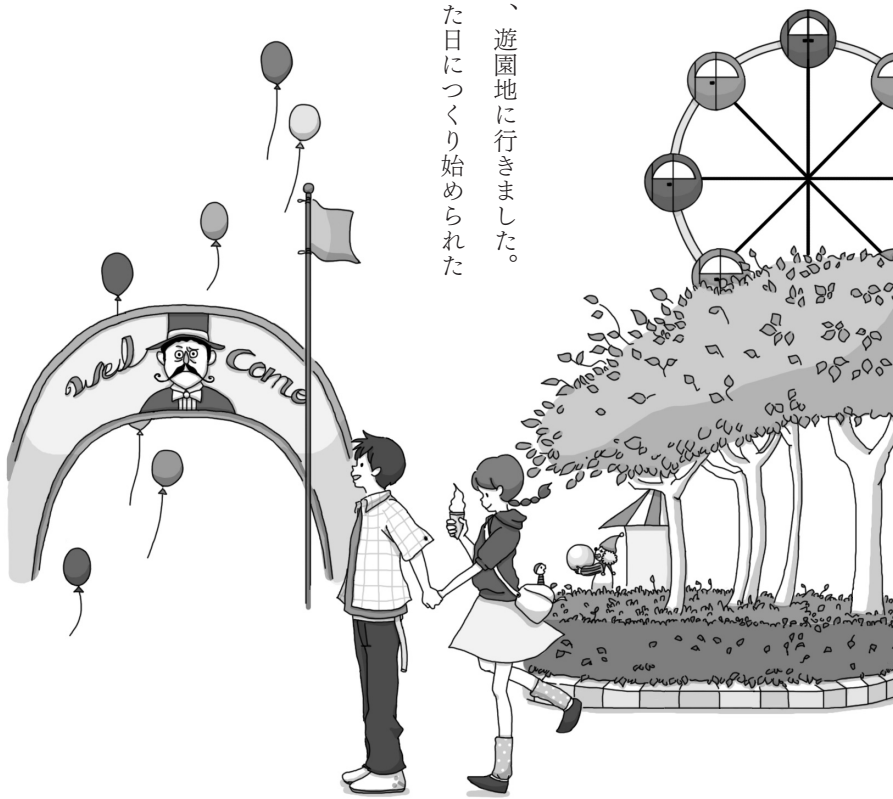
7歳のとき、
教科書をまったく使わない先生の
クラスに入って、
学校がたのしくて
しかたありませんでした。
その先生は、南国育ちで、
よくイルカと遊んだ話を
してくれました。



15歳のとき、
美術館に立ち寄り、
ある絵のまえで、1時間すごしていました。
それは、幼い頃に手術で
視力を取りもどした女の子が描いた絵でした。



はじめてのデートで、遊園地に行きました。
そこは、僕が生まれた日につくり始められた
遊園地でした。



大学生になって、
一人暮らしをして、
はじめてできた友だちは、
アパートの隣人^{りんじん}でした。
彼は、
遠い外国の小さな村からきた留学生^{りゅうがくせい}で、
いつも自分の村のことを話していました。
みどりあふれる美しい村、だけれど、20年前は、
一面の砂漠だったといえます。



僕は、会社員になりました。

毎朝、電車に乗って、会社のビルに通いました。一日中、書類をつくったり、電話が鳴るのを待っている仕事でした。

僕は、子どもの頃からよく、自分の居場所がない、ない、と思ってきましたが、会社というところは、もともと自分の居場所から遠いところでした。

それにしても、丸一日、空の見えない、机ばかり並んだ部屋でじっとしていると、生きた心地がしません。ここにいるだけで、僕は呼吸があらくなり、どれだけ水を飲んでも、のどがカラカラになってしまいます。

だから、ある日の仕事で、僕はついに立ちたちあがり、

「あわわわっわ！」

と、叫び声をあげてしまいました（まわりの人たちはみんな僕を見ていました）。

「ちょっと、君」

さっそく、課長が僕を別室につれていきました。

「もう落ち着いたかね？　そこに座りなさい」

「…はい」

「かわいているようだね。君にとって、この職場は、砂漠か…？」

と、短い言葉をかわした後、僕は、その日のうちに、会社をやめることになりました。

けれど、これでよかったです。というのも、ついさつき、たいせつなことを忘れていたことに気づきました。僕は自分の力でどこへも行けるようになったのに、まだどこへも行っていなかったのです。たとえば、外国にも、砂漠にも、僕は自由に行けるのです。

中国は北京ペキンです。

夜の8時、飛行機から税関ぜいかんをぬけて、そのまま空港バスに乗り、市街のまっ暗な道で降りました。ホテルの予約はありません。僕は両替りょうがえしたばかりのお札をにぎったまま、通りに突っ立っていました。

飛行機やバスに乗っている間は、座席にすわって景色を眺めていればよかったのですが、いざ街に放り出されると、自分の足で動かなくてはなりません。とにかくホテルをさがす必要がありました。といっても、どこをどうさがしてよいのか、さっぱりわからず、ただ立っているだけで精一杯でした。

まずは腹ごしらえをしようと、目の前の食堂に入ったのですが、メニューを開いても、見慣れない漢字の文字ばかりで、まったく何の料理だかわかりません。なんとなく左から3つを順に指さすと、運ばれてきたものは、3つともアイスクリームでした。

ぜんぜん腹ごしらえができないまま食堂を出て、ふたたび通りに立っていると、ランニングシャツの男が、僕のそでを引っぱっていました。早口の中国語で話しかけてきます。ホテルのカードを持っているので、どうやら客引きのようでした。

僕はまたその男に引っぱられ、自転車の荷台に乗せられました。

すぐさま自転車は、北京ペキンの下町を、自転車とは思えないほどの速さで駆けぬけます。僕は振り落とされないように、さつき会ったばかりの男の背中にしがみつき、流れる景色の中、庶民の生活をのぞき見ていました。

ブタの頭を切りきざむ屋台の女たち、ラーメンを食べている家族や、はだか電球の下で麻雀まあじやんをする男たちがいます。まぶしいネオンと、漢字だらけの看板かんばんが過ぎさっていきます。

僕はホテルに着いても、やはりフロントの前で突っ立っていました。

何と言えよ泊めてもらえるのだろうか、英語か中国語か、そもそもどんな言葉で言えよよいのかもわからず、とりあえずカバンの中から『旅の中国語会話』という本を出し、

「ハイ、オウファン、チェインマ」

『部屋はありますか』と発音しました。それでも、フロントの女性は、じつとめずらしそうにこちらを眺めているだけです。それから僕は、額ひたいに汗、口のまわりを泡だらけにして、もはや何語だかわからない言葉を必死でくりだし、なんとか部屋を用意してもらったのでした。この日、僕は、外国で

はまったく言葉が通じないというあたりまえのことを、はじめて自分で体験したのです。

夜、まったく眠れません。深夜3時をすぎても興奮がさめず、パンツひとつでベッドに寝転んでゴロゴロしていました。外国へ飛びだしたショックで、記憶の引き出しも飛びだしたのでしょうか、幼稚園の頃のことを思い出してみたり、頭の中で小学校への通学路をたどってみたりしているのです。明日の予定すら決めておらず、考えなければならぬことは他にもあるはずなのに、なんでもない思い出ばかりが、浮かんでくるのでした。

これから僕が向かおうとしているところは、広い中国の中でも、ずっと奥地にある「タクラマカン」という、世界で2番目に大きい砂漠です。なぜここをえらんだかという、地図帳をひろげて、ここだけ一面まったく何も書かれて

いなかったからです。きっと、書かれていないだけで、ほんとうは美しい景色があるにちがいないのです。

よく眠れなかったせいで、翌日、チェックアウトの時間まで寝てしまい、僕は、掃除のおばさんに叩き起こされました。

あわてて荷物をまとめ、出ていこうとすると、そのおばさんが、

「イッテラッシャイ」

と、声をかけてくれました。僕はすかさず『旅の中国語会話』をひらき、

「ツアイチエン、シエイシエイ（さようなら、ありがとう）」

と言いかえました。

その後、僕は3泊4日の列車に乗って、砂漠の入口の町コルラへ入りました。



コルラからその先の砂漠へは、バスが唯一の交通手段です。

僕が切符を買ったとき、ちょうど出発ぎりぎりの時刻で、バスに乗りこんで見ると、すでに空席はありません。しかたなくせまい通路で荷物の上に腰かけました。

バスが走りだすと、あつという間に岩と砂だけの荒れ地になり、車内もガタガタとゆれ始めます。せまくて、混雑して、その上暑くて、汚くて、まるで家畜小屋かちくこやのような車内でした。

ところで、この頃にはもう、僕は言葉の心配などなくなっていました。じつに、中国は漢字の国なので、筆談ひつだんをすれば、なんとか通じるのでした。だから、僕のポケットには、いつもメモ帳とペンが入っています。

さて、一度、となりの男に「トイレ休憩はいつ？」と聞いたために、近くの乗客たちは、外国人の僕と筆談ひつだんで話ができるとわかったようで、だれかれとなく僕のメモ帳を取りあげ、はげしくゆれる中、うまくバランスを取りながら「中国ははじめてか？」などと質問を書いています。僕も必死で返事を書きました。

退屈たいくつなバスの中で、外国人と筆談ひつだんで盛り上がっている様子は、すぐに知れわたります。すると「ぜひ私も！」と考える人がいるもので、それがバスのいちばん前にもいたりします。運転手のとなりの爺じいさんが立ち上がり、しつこく何か言っているかと思えば、乗客たちが僕のメモ帳とペンを前へ前へとリレーしていきます。

数分後、爺じいさんの書いたメモが、後ろへ後ろへと運ばれてきました。ちなみに、質問の内容は「旅行の目的は？」というありふれたものでした。僕が書いた返事の紙も、また前へ前へとリレーされます。

そのうち、僕と筆談する順番待ちができるほどになり、その順番を管理する者まで現れ、「待て、おまえは3ばん目だ」「よし、次はおまえだ」とバスの中でしきりだしました。僕はその男に言われるまま、タレントがサインでもするように、次々と質問に答えていました。

バスは、砂漠の真ん中をのろのろと走りつづけます。ときどき、砂に埋もれて道が消えて、どうなるのだろうかと僕は一人であわてていましたが、運転手は直感と経験で右に左にハンドルをきり、いつしか道らしきところに戻るので。外は、風が吹き荒れていました。砂漠の空は、気まぐれです。晴れたら

灼熱しやくねつ、いったん曇れば強い風を吹かし、砂を巻き上げます。

あいかかわらずバスはゆれ放題ほうだいで、座席のない僕はあちこち転げまわり、手足がアザだらけでした。そんな車内でも、乗客たちはガツガツと果物をしゃぶったり、落花生をかじっていたり、たえず口を動かしています(ごはんの時間には、またちゃんとごはんを食べるのです)。

午後になり、気温が一気にあがりました。ひとつしかないはずの太陽が、ここでは3つも4つもあるかのように暑く、ときどき数分前の記憶がなくなったります。水が飲むと、少しすつきりします。

ところで、砂漠といえど、はてるまで砂ばかりの、何もないところだというのは、たしかに大きなまちがいでした。

突然、砂と石コロだけの景色に変化があったのです。

…川です。

川が流れていました。水分という水分を蒸発じょうはつさせる砂漠を切りさいて、とうとうと川が流れていたのです。その川をわたる一瞬、砂を舞いあげる風の音が、川の水の音にかき消されるのです。

バスの中も、ざわざわしています。のどがかわいている乗客たちは、窓や座席をたたいて「とまれ、とまれ！」と叫んでいるのですが、運転手は少しでも早く進みたいのか、バスをとめようとしません。

ところが、乗客の一人が窓から飛びおりて、川へ走っていきました。手には4つも水筒を持っています。あわててバスがとまると、こんどは誰かが扉を開けて、次々に外へ出ていきます。バスから出ていったのは若い男ばかりで、彼らは老人や女性たちの水筒をまるでリレーのバトンタッチのように受け取って飛びだしていくのです。

しかたなく運転手はエンジンをきり、しぶしぶ休憩となりました。乗客たちはのどが波打つほどに水をガブ飲みし、手足を洗って、生き返ったような顔をしています。

僕には、とにかく、この川が不思議でした。砂漠の真ん中に、幅3、4メートルにもわたって、冷たい透明な水が流れているのです。地図に何ひとつ書かれていない広大な砂漠に、唯一あったのは、この川でした。

さて、砂漠がめずらしかったのも、その頃までです。

道なき道を走るというのに、バスはいまにもタイヤが外れそうなほどヨレヨレで、にぶい音が聞こえたかと思えば、車体ごと砂に埋まってしまう。そんなとき、乗客の何人かがバスを降り、後ろから力いっぱい押すことになりました。僕は通路にいたので、真っ先に降りる役目でした。

僕らがバスを押してタイヤを砂から出し、なんとか車体が動きだすと、急いで追いかけて、乗車扉からのびる手につかまります。一度や二度ならたのしかつたこのやりとりも、回を増すごとにつらくなり、バスに戻ると、通路に倒れこみます。おまけに水筒の水がそこをつき、くちびるが歯ぐきにはりつくほど、のどがカラカラでした。

…そんなときです。

僕のメモ帳とボールペンを、誰かが持っていったと思えば、数分後、メモが届きました。どうやら書いた人は、「旅行の目的は？」と聞いてきた、いちばん前の席の爺さんでした。

君は、砂漠の旅がづらいのか？

それは、砂漠を見まちがえているからだ。

…と、書いてありました。

僕は、ペンをもつ気力もなく、返事を書きませんでした。すると、またその爺さんからメモが渡ってきました。

君は、なぜおどろいたのか。

川が砂漠に迷い込んだように思ったのか。

さかさまだ。

川こそ、砂漠の創造者だ。

僕は、この意味がさっぱりわからず、「なぜ、川が砂漠の創造者なのか？」と

質問を書いて送りました。数分後、また爺さんのメモが乗客たちのリレーで後ろへ後ろへと渡ってきます。そこには、一言、こう書いてありました。

砂漠の砂は、川が運んできた。

そもそも、川が砂漠をつくったというのに、その川を見ておどろくのはすじちがいだ、と言っているのでしょうか。僕は、爺じいさんのこの言葉を読んでから、不思議なことに、少しでも身体が軽くなり、一面砂だけの景色も、見とれるほど美しく思えてきたのです。

夕暮れどき、バスのエンジンが、とうとう止まってしまいました。

砂漠の真ん中で、また休憩です。ヒーヒーという笛のような風の音色が、あちこちの砂山から聞こえています。僕ら乗客は、まばらに生えている人型の枯れ木の影に2、3人ずつ身をかくし、舞いあがる砂と強烈な日ざしから逃のがれて

ていました。

結局その日はエンジンが直らず、乗客たちはみな、バスの中で夜を明かしました。砂の地平線から、じりじりと朝日がのぼってきます。また今日も、はるか遠くにあるたったひとつの太陽が、この砂漠を照らすのです。

朝、顔を洗って砂漠の道を眺めていると、ふと、この景色を見たことがあるような気がしてきました。

たしかに、幼い頃の僕は、世界のあちこちで起こっている出来事やあらゆる美しい景色を、まるで鳥が街並みを見下ろすように眺めていたのです。

だから――、その日、僕はバスには乗らず、一人で歩きはじめていました。

…旅とは、
どこへも知らないところへ行くことのようにで、
じつは、記憶のどこかにある景色を
さがしにいくことなのかもしれない。
まるで砂漠の川みたいなのに、
そもそもそこにあつたほどの、
あたりまえのものを見つけるように。



6 砂漠のはての花

きっと、雨をふらす必要がないからでしょう。ここには、雲ひとつありません。
僕は、そのはてしない青空の下を、ただ歩きつづけました。

水のない湖を越えました。身を寄せあうラクダの群れが、巨大な船のように
ゆつくり北へ進んでいきます。

太陽がのぼった頃、僕は小さな村にたどりつきました。土かべの家が並ぶ広
場で、僕は子どもたちに囲まれます。水瓶みずがめをはこぶ女たちもほほえみかけてく
れます。

5つの住居と、朽くちた寺院と、神の像があるだけの、小さな集落でした。

「外国人よ、まあ、すわりなさい」

長いヒゲの老人に声をかけられました。木陰こかげにすわって鍋を煮にこみ、お茶をつくっているようです。なぜかはわかりませんが、老人は、片言かたことの英語が話せるようでした。

「よく来たな、一杯、飲んでいけ」

老人は僕を見上げて、茶色の器をさしました。

僕は入れたての熱いお茶をもらうと、ひとつたずねました。

「ここは、どんな村ですか？」

「……開拓村かいたくむらだ」

老人は単語を並べるように、ゆっくりと話しはじめました。

「……だが、むかしのことだ。私たちは、この土地をたがやした。しかし、どんな作物も、根づかなかった。この村には5年間、雨がふっていない」

「この村の先にも、村はありますか？」

「……いや」

「では、ここから西は、どんなところですか？」

「……軍隊の基地があつた。だが、いまは、もうない。その先は、砂地があり、広大な枯れ池かがあり、そしてまた砂地があり、何もなくなる……」

長いヒゲの老人は遠くを眺めると、それきり話をしようとはしませんでした。

村の西側には、顔のはがれた神像が立っています。

「風の神だ」

と、村人たちは言います。何年か前は寺の中にあつたのか、崩れた壁くずがあたり転がっていました。この神さまは、砂漠の奥のほうから吹いてくる強烈な風をあびながら、荒野に向かって立っていました。

電柱が一行に並んでいます。

おそらく軍隊の基地へ電気を運んでいたのでしょう。

僕はそれをたどるように西へ歩きました。

いつの間にか電線が切れ、

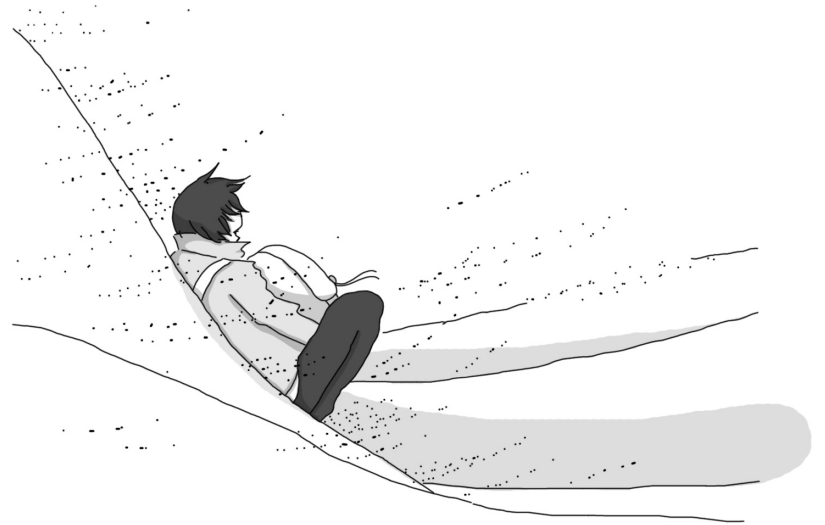
電柱もなくなっていました、

僕はただ西へ歩きつづけました。

ひび割れた地面。



吹き荒れる風。



僕は砂山の影に身をかくして少し休むと、再び歩きはじめました。

黄土色の砂ほこり。



老いた樹とかわいた草。



太陽が沈むまで歩きつづけて、その先にあったものとは、やはり、草一本生えていない、砂だけの地面でした。この頃にはもう、かつて僕が見た景色とは、このことなのかどうか、さっぱりわからなくなっていました。

空が一気に暗くなりました。帰り道も、方向も、すっかりわかりません。日が暮れたとたんに気温が下がりはじめ、僕はぶるぶると震えだしました。水筒の水もなくなってしまいました。頭の中が、不安と恐怖でいっぱいになり、世界でひとりぼっちのようにも感じていました。なんでこんなところに来てしまったのだろう、わけのわからない理由で歩きだしてしまっただけなのに、一人で野たれ死んでしまうのか……。

僕は、気を失う寸前というほどのあせりで、ひざをかかえる以外、なにもできなかつたのですが、そのとき、あまりにも頭がまっしろになったおかげで、ふと、幼い頃、こうしてひとりでいるときに「声」と話していたことを思いだ

しました。そして、この、どんな言葉も届かない砂漠のはてで、

「おうい」

と、呼んでみたのです。

すると、おどろくことに、どこからともなく、声が聞こえてきました。

「なにしてんの？」

幼い男の子のような声でした。

「まだしんじやだめだよ、オトーサン」

そうなのです。僕は、生まれてはじめて「お父さん」と呼ばれました。しかも、まったく姿のない声に。もちろん、このときの僕には、子どもなどいなければ、奥さんもいません。

「君は、ひょっとしたら……、僕の子かい？」

「うん」

「けど、まだ生まれていないんだよね？」

「うん」

「どうして僕と話ができるのかい？」

「よんでくれたから」

「それに…、君のお父さんだから？」

「そうだけど。でも、だれとでもはなせるよ」

「君は、世界の、誰とでも話ができるのかい？」

「そう」

「それなら、知っている人に、聞いてほしいことがあるんだ。えっと——」

「うん」

すると、その幼い声は、誰に聞いたのか、火をおこして荷物をもやし、身体をあたためることや、日の出までの時間を教えてくれて、のどのかわきをまぎ

わらず歌までうたい、朝がくると、こんどは、ここからいちばん近い集落の方角を、ていねいに教えてくれたのでした。

だから僕は、道ひとつない砂漠の真ん中を、右に左に進路をとり、鼻歌をうたいながら歩いていきました。昨日の開拓村かいたくむらにたどりついたのは、その日の夕方です。

「声」の正体が、いつか僕のもとに生まれてくる男の子なのかどうか、このときはまだ、たしかめようがないのですが、ただ、ひとつたしかなことに、あの声は、この砂漠のはてにおいて、村へとつづく道を知っていたのです。

あと、もうひとつ——。

開拓村かいたくむらへの道のりで、ひとすじの小川と、ウソのように一面広がる花畑を見ました。しかし、そのことを村人に話しても、

「おかしなことを言う外国人だ」

と、あしらわれ、まるで信じてもらえませんでした。
誰も、あの、息をのむほどに美しい景色を知らないのです。

僕は、長いヒゲの老人の家で、ごはんを食べさせてもらっていました。
日が暮れてから、外で声が聞こえ、数少ない村人のほとんどが、右へ左へ走りまわり、大さわぎしています。何が起こったのだろうと、僕もあわてて家から出てみると、外は、まるで海がふってきたような、どしゃぶりの雨でした。

7 息子が生まれた日

僕はそれから毎年のように、世界のあちこちを旅しました。

長距離バスに乗って殺風景な道を進み、終点で降りると、地図にもっていないくらい小さな村に着きます。バスから降りたとたん、はじめて外国人を見たものめずらしさで、村中の人が集まってきました。

そんな村では、英語ができる人すらただの一人もいませんが、滞在中、村の老人や子ども、おばさん、おじさん、誰かれともなく僕に話しかけてきます。

もちろん現地の言葉は、さっぱりわかりません。首をか上げて困った顔をしていても、村の人たちはおかまいなく、世間話をするみたいで、どんどん話し

かけてくるのです。

ところが、そんな中で何日も過ごしていると、ふいに、彼らの声が聞きとれたように感じるようになりました。耳の裏に翻訳機ほんやくきでもついたみたいに、意味不明の言葉が、ごく自然に耳元にとどき、滞在初日からずっと聞きとれなかった言葉すら、あ、あれはそういう意味だったのか、と数珠じゆずつなぎでわかりはじめるのです。

そんなふうに旅をつづけていると、いつも不思議と、巨大な滝や、深い森のピンク色の湖、無数のクジャクが舞い降りる谷など、信じられないほど美しい景色と出会いました。これには、特別な知識や技術などいりません。うろろうして、なんとなく声が聞こえる方向へ歩いていくだけです。

声というものは、耳に届いたから、声ではないのです。たとえばラジオと同じで、それは、波のように四方八方に広がり、その場にはない遠くの人にも、

つまりは世界中の人にも、じつは届いているのです。あとは聞こうとするかどうかの問題だと、「声」は言っていました。そして、ラジオとちがうところであれば、あらゆる声は、広がり、消えることはないのです。だから、仮に紀元前きげんぜんの羊飼いや、恋をしている村娘が、たった一人の高原でつぶやいた声ですら、この世界に、永遠に記録されているのです。

僕が見た景色の話、友人の友人から聞いたという女性と会うことになりました。彼女は、僕よりすこし年上で、美術学校の先生をしていました。そして顔をあわせるなり、

「あなたが見た景色を、わたし、子どもの頃、絵にしたことがあります」と言ってきたのです。

はじめて会ったのは、近所の喫茶店でした。このとき、ふたりともハラペコ

だったので、ランチを注文しました。そして、さっきの絵の話はどこかへ行ってしまったって、どこからか不気味な声が聞こえると思えば、

「ふっ、ふふっ」

と、口いっぱいにごはんをほおばりながら彼女が笑っていました。

「なにか、ありましたか？」

「うふふっ、はじめて会った人と、ごはん食べるのって、おかしいですよね」

「・・・そうですか」

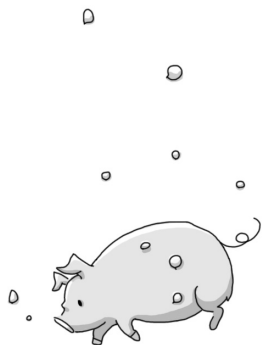
それから、僕と彼女は何度となく、いつしよにごはんを食べるようになり、同じアパートで暮らしはじめ、ほどなく結婚しました。

翌年、妻は妊娠するので、彼女のお腹が大きくなるにつれて、僕には、ドキドキしてたまらないことがありました。というのも、かつて僕がそうした

ように、妻のお腹の中から「声」が聞こえてくるのではないか、と思ったのです。ところが、陣痛がはじまった妻とともに分娩室に入るまで、これといって何も起こりませんでした。

妻は、難産なんさんでした。出産を終えるまでの2日間、僕も連れそっていたのですが、息をハアハアさせてもだえる妻の手をにぎり、こうしてわが子が生まれ出ようとしているとき、僕の中でも、大変なことが起こっていました。それは何かというと、まるで頭の中が映写室にでもなったように、次々とイメージが入りこんできて、今この瞬間、世界のあちこちで起こっていることが、見えたのです。それは、世界というこれ以上ないほどの大きな存在と、自分が入れかわったような感覚で、安らかで、ここちよく、光に満ちた体験でした。

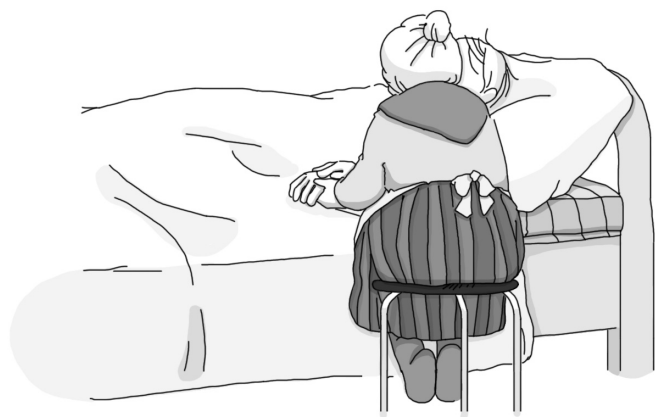
ちようど、わが子の頭がでたとき、
難破船なんぱせんの中にいたブタが、海へ飛びこみ、
船を陸地へみちびきました。



同じとき、戦場の兵士が、
傷ついた敵兵てきへいに、
心臓マッサージをほどこしました。



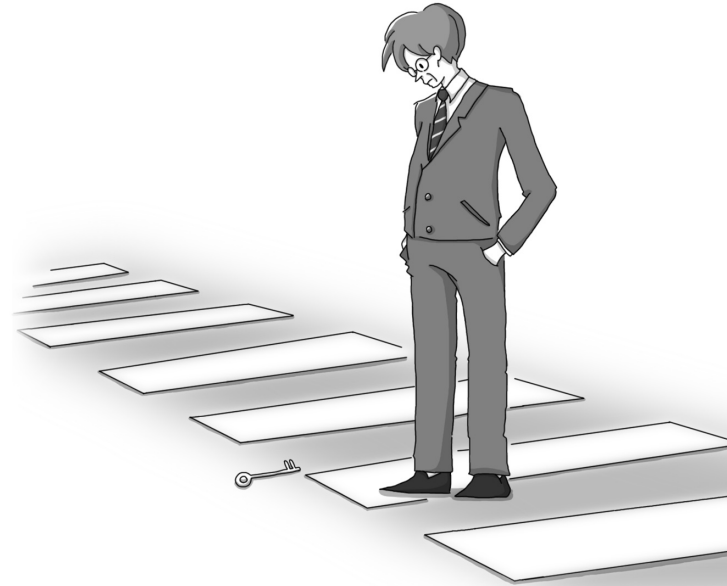
寿命を終えて息をひきとる老男が、
妻に、愛の言葉をささやきました。



3年間、
部屋から出たことがなかった青年が、
スーパーマーケットへ、
おかずを買いにでかけました。



数学者が、スクランブル交差点の真ん中で、
新しい公式をあみだしました。



そのとき、妻が男の子を産みおとしました。



ところが、生まれてきたわが子は、産声をあげることはありませんでした。僕にも妻にも、まったく抱かせてもらえず、赤ん坊は鼻に管をとおされ、どこかへつれていかれたと思えば、保育器の中に入っていたのです。

赤ん坊の鼻や身体のうちから管がのびて、その管と管が枝分かれし、そのうちのひとつは、ピーピーと音がる機械につながっていました。その機械の音に合わせて、小さな胸が、わずかにふくらんだりちぢんだりしているので

す。
わが子は、保育器の中で、まるで毛が抜け落ちたヒヨコのような身体で、小さなオムツだけつけて、ぐったり眠っていました。

「この子は、どうなりますか……?」

僕は担当医にたずねましたが、いまの時点ではまだわからない、もう少し様子を見させてください、とのことでした。とはいえ、同じ日に生まれた赤ん坊

にくらべ、肌の色も、身体の大きさも、なにもかもちがうのですから、この子がこの先どうなるのかわからず、ちゃんと生きていけるだけの身体をもつて生まれてこなかったことは、僕にもなんとなく理解できました。

何日かして、はじめて、赤ん坊にふれることを許されました。

「どうぞ、手をにぎってあげてください」

担当医に言われるまま、僕と妻は、保育器の中に手をしのばせ、赤ん坊の、これ以上ない、世界でいちばん小さな手をにぎりました。意外にも、いつ生命が消えてもおかしくないこの子の手は、とてもやわらかく、あたたかでした。

それから何日も、僕と妻は交代で、ガラス越しに、まるで動かない赤ん坊のよこに座っていました。

ひさしぶりに病院から家へもどると、妻が玄関に花をかざっていました。

「どう、きれいでしょ」

保育器のよこにかざるために用意した花だったといえます。けれど、手足を消毒して特別な服を着なくては入れないその部屋に、花をかざるなどできるわけもなく、家に持って帰ってきたというのです。

「ほら、見てよ、この花」

と、妻がまたしつこく言ってきたのは、わけがあるようでした。そうです、僕自身もすっかり忘れていて、思い出すのにはずいぶん時間がかかりました。小

さな花びらがたくさんついた、黄色い花。僕があのだ漠の花畑でとってきた種で、こっそり妻が咲かせたのでした。

その瞬間、ふいに、頭の上の方から、

「お・と・う・さ・ん」

と、声があったのを、僕はけっして聞き逃しませんでした。

同時に、ピカッと、ひらめきがおこりました。

「ちよつと、行ってくる」

「なにへ？」

「もつかい、ビョーイン」

僕は、かびんから一輪だけ抜いて、コートの中にしのばせると、全速力で自転車をこぎ、ただ一直線に病院にもどって、わが子の前に座りこみました。

「おぼえてるか？ この花」

コートの中にかくし持っていた花を、そっと赤ん坊に見せると、声が聞こえました。

「……う・ん、おぼ・え・て・る、よ」

このときにはもう、どこから聞こえているかとか、誰の声かなど考えることはありませんでした。この子はあいかわらず保育器の中で、目を閉じて横たわっているだけなのです。

「ぼくね……、う・まれ・て・くる・こと、き・め・た・ひから、ずっと……、ずっと……」

「……ずっと？」

「ずっと、お・とう・さ・んに、はなしか・け・て・たんだ・よ……。まだ、お・かあさ・ん・と、べつ・の・とこ・に、いた・ね」

「やっぱり、そうだったのか、ありがとう」

「お・とうさ・ん、あのね……」

「……どうした？」

「ぼく、うま・れ・て・きた・んだ」

「うん、よくがんばったぞ。生まれてきてくれて、ありがとう」

「ぼく……、まだ、し・に・た・く・な・い・ん・だ」

「わかった。とうさんが、助けてやるからな」

「うん……あ・り・が・とう」

「必ず助けるから。待ってろ」

それきり、ただだけ呼んでも、返事がくることはなく、話ができたのは、ここまででした。赤ん坊は、保育器の中で、眠っています。

僕は、家に帰ると、部屋にこもりました。

机に向かってペンをにぎり、砂漠を旅したこと、そこで迷い、声にみちびかれて助かったこと、その道のりでひたすら美しい花畑を見たこと、息子が生まれた日に見た世界中の出来事のことなど、まだ誰にも話していないことを、あらゆるざら書きつらねました。

…そして、いま、生まれてきたわが子の生命が、
消えかけています。

この子は、生まれる前だというのに、
僕の生命を助けてくれました。

僕のところにも生まれてくるために、
どうしてそんなことができたかというと、
世界のすべての人と話しができて、

僕を助ける方法を聞いたからだ。

こんどは、僕が聞きたいのです。

世界のみなさん、

この子を助ける方法を知っている人はいませんか。

みなさんの知恵と力で、

どうか、僕の子どもを助けてください。

…と、最後には、やり場のない気持ちを書き書いていました。

こんな文章を書いてみたところで、わが子が助かるわけでもないとはわかっています。でも、書かずにはいられなかったのです。

そして、少したってから、やっぱり何の意味もないことがわかり、僕は、かなしくてくやしくて、この紙をにぎりしめ、あてもなく街を歩いていました。

僕は、完全におかしくなっていました。交差点でたくさんの人とすれちがううち、ひよっとして、この中にきつと、あの「声」が聞けて、わが子を助ける方法を、知っている人がいるのだと思いきみ、たまたま目の前にいたメガネの男性に、この紙を手渡してしまったのです。

メガネの男性は、だまって受け取り、そのまま歩いていきました。

「なんだ、そうか」

と、僕は、またひらめきました。

さつきと同じ文章をまた書いて印刷して、通りすぎる人にくぼろうと思いつたのです。息子との生まれてはじめての約束を、ほっておくことなど、できませんでした。僕はなんとしても、助けたかったのです。

それから何日かのことは、よくおぼえています。ふと気づけば、印刷した紙数千枚をくばり終え、僕は真夜中の交差点で、ひとり立っていました。

2日ぶりに家へ帰ると、心配そうにしていた妻に、

「街で、これをくばっていたんだ」

と、1枚だけ残っていた紙を渡しました。

妻が「声」のを知ったのは、たぶん、このときがはじめてだったはずですよ。

ところが、一読するなり、

「ずっと、ずっと、ずっと不思議だったんだけど……」

と、自分の話をはじめたのです。

「わたし、子どもの頃ね、事故で目がみえなくなって、何度も手術したことがあるの。なんにも見えなかったんだけど、そのとき、いつも、まわりをばたばたとんでた小さな子がいて、わたしが退屈しないように、いろんな人をつれてきてくれて、それで最後にこう言うの、だいじょぶだよ、おかあさんって」

病院に、荷物が届いたのは、それから5日後のことでした。

中身は、紫色の、一輪の花でした。短い手紙が入っていました。

私は、チヨウを研究している者です。
あなたが美しい景色と出会ったように、
私は、世界でいちばん美しいチヨウを、
さがしにいったジャングルで、
帰り道がわからなくなり、さまよって、
たくさんの美しい花を見ました。

そのとき持ち帰った種で咲かせた花を、贈ります。
あなたのお子さんが、はやく元気になりますように。

翌日、また別の3人から、荷物が届きました。3つとも、それぞれ、自分の

好きな花を送ってくれたようでした。

それから毎日、息子の病室に、あちこちから、花や種が届きました。

さらに、これからがほんとうに、びっくりすることなのですが、また1週間ほどたつと、こんどは外国から荷物が届きはじめました。ヨーロッパやアメリカ、南半球やアフリカからも、中には枯れているものもありましたが、それぞれにうまく長持ちする工夫がほどこされ、土地の花が届けられました。

その中のひとつに同封されていた手紙には、まだ一度も言われたことのない、けれど、あたりまえの言葉が書かれていました。

赤ん坊のお父さんへ

ご誕生おめでとう。

私は、友人が翻訳してくれた、

あなたの手紙を読みました。

私が大切にしている花を贈ります。

贈られてきた花たちは、保育器のある病室におくことはできないのですが、院長先生のはからいで、病院の中庭にかざることができました。

僕ら夫婦は、一日に何度もかびんや鉢植えを買ってきては、その日に届いた花を一つ一つ、ていねいに植えました。

病院中の患者さんや看護師さんが、この中庭の片すみにやってきては、じつと眺めて戻っていきます。誰一人見たことがなかった光景でした。毎日気にもせず通りすぎていた病院の一角が、特別な場所になっていました。ここは、たしかに、世界中の花によってつくり上げられた、世界でいちばん美しい場所のひとつでした。きっと、息子が言うように、どんな人でも、誰とでも話がで



きるのなら、みんなこの景色のことを知り、見にくることができたのでしょうか。

花の届けものがとだえてから1ヶ月、赤ん坊は、ようやく保育器から出ることができました。うっすら目をあけ、手足を動かしたり、口をパクパクさせるようにもなりました。毎日、ありったけの体力をつかっっておっぱいを飲み、それ以外の長い時間は、ひたすら、しあわせそうな顔で、眠っていました。

この頃には、やはり、どれだけ呼んでも、「声」が聞こえてくることはありませんでした。きつと、その必要がなくなった、ということなのでしょう。これから、いっぱい、いっぱい、話ができるのですから。

病室に行くと、おっぱいを飲み終えたばかりの息子が、妻の腕の中で眠っていました。

「この子、来週には、退院できるって」

妻は人差し指で、赤ん坊のやわらかいほほをつついていています。

「いい寝顔でしょ」

「そうだな」

「世界中の人が友だちよ、って顔してる」



『世界でいちばん美しい景色のはなし』
全国の有名書店でご注文いただけます。
ホノカ社オンラインショップでも発売中！

URL <http://u-keshiki.net>

